

S・フロイトの文化論と人間疎外

The Alienation of S.Freuds philosophy

能木 敬次[※]

Keiji Nohgi[※]

Abstract

In later years Freud dared to describe the problem of the European culture from the point of view of psychoanalysis. He says, the mankind has restrained (mainly) his impulse including sexual intercourse (Begierde) to build the culture which the society needs, while he feels discomfort (Unbehagen) by this operation. Freud says, the cause of that is in an interaction of culture-creating and the restrain of impulse. That is the Alienation of culture.

キーワード：フロイト、精神分析、人間疎外、「文化の居心地の悪さ」

序.

産業資本による労働者の人間疎外を初めて理論的に解明したK.マルクス、彼の晩年の状況は長年の困窮の中での研究・活動がたたって健康不良に陥り、ドイツの官憲の力の及ばないところで転地療法を繰り返していた。そうこうしているうちに長年辛苦を伴にしてきた妻と長女に病で先立たれ、ついに彼自身もロンドンで力尽きた(1883,3,14)。そこには客死のような悲哀が感じられる。一方、その頃はるか南のオーストリア・ハンガリー帝国の首都ウィーンで一人の同じユダヤ系の学生がウィーン大学医学部で学位を得、麻酔薬としてのコカインの役割に目をつけ、その臨床研究に着手していた。ジグムント・フロイトである。彼は間もなくヒステリー研究へと転じ、無意識の研究領域を切り拓き、精神分析学の確立に生涯を捧げたのは周知のことである。ここでは彼の研究生活最終段階ともいべき時期が問題とされる。彼の精神分析理論は長年、学会から無視され続けてきたが、晩年になるとようやく陽の目を見始めた。そんな時、彼は今まで厳格に守り続けてきた門外漢の仕事、つまり精神分析の知見を哲学・文化論への応用をずいぶん控えめな態度であったが着手した。それが本論文のテーマである。彼の精神分析理論・文化論の課題は彼の弟子達によって拡大・修正されていった。なかでもE.フロム(1900-80、『自由からの逃走』)、F.ノイマン(1900-54、『ビヒモス ナテズムの構造と実際』)はマルクスとフロイトの思想を合流させ、ファシズム批判を展開し耳目を集めた。さらにH.マルクーゼ(1898-1979、『一次元の人間』、『エロスの文明』)はそれにソ連型権威主義・アメリカ型産業資本文化を含めて現代文明批判を展開した。彼らにフランクフルト学派、新フロイト学派が続き、フロイト理論の社会学・政治学・言語学への応用・修正が図られ、フロイト理論の地位をより確実なものにしたのは周知のとおりである。このようにフロイトの精神分析学は後続する者たちによって人間の営

※日本経済大学経営学部グローバルビジネス学科

為全般を研究対象とするアントロポロジーへと変貌していった。マルクス経済理論との合流といい、ファシズム批判、アメリカ型高度産業資本の消費戦略とそれによって翻弄されるインテリ階層と労働者階級批判といい、ソビエトの当初、マルクス主義の厳格な実践を目指しながらもファシズム的権威主義へと墮した共産主義批判といい、それらはフロイト理論によるフロイト以後の大きな成果であるが、そこにはもはや本来フロイトがその理論を展開していった際の性の衝動とその抑圧を始原とする西洋文明・文化を享受するも同時にその圧迫に苦悶する人間の体感を看取することが難しい。本論はフロイト理論の成立から一世紀以上を経た現代、他の発展的・派生的展開を交えず純粹に、しかも現代独自の状況を見据える眼差しで彼の人間疎外論を検証する。

1. 不幸の源泉としての文化

フロイトは晩年、幼児性欲論・リビドー理論の成果をもとに遠慮がちな姿勢ではあるが、独自の「文化論」・「宗教論」へと足を踏み入れていった。それによれば、人間はその本能の内に性衝動・攻撃衝動を保持しているのだから、人間の集団がどんな社会的発展を遂げてもリビドーとしての衝動は取り去ることはできない。やがて、人間集団が火の使用を発見し、原始的暴力状態から抜け出しはじめ、文化の曙へと立ち至るや、人間には二つの苦難が当面の問題として浮かびあがる。¹⁾ それは自然の暴力、われわれ自身の肉体の脆さ、および家族や国家・社会における人間相互の関係を規制する制度の不完全さである。これらの苦悩の源泉に対応するため文化（それは上掲したように人間の本質的特性の抑制を伴うものであるが、）が要請された。それは自然の暴力からの、人間自身の脆さからの逃避・防衛という安全性の獲得とその実現のための武器であった。しかし、その努力はやがて幸福との交換を伴い、また常に失敗の憂き目を見る運命にあった。なぜなら衝動そのものはけっして取り去ることはできないしるものだからである。そうやって人間自身によって要請された文化 - 日常生活における近親性交禁止、一夫一婦制、清潔と秩序、美、正義 - ²⁾ この本来、人間社会を擁護するための機構であるはずの文化により人間自由は制限を受ける。そして誰しもこの制限から免れることはできないのである。これによって人間社会がその文化的理想を果たすために人間に課す禁圧の量に堪えられないがゆえに神経症になるのだとフロイトは言う。結局、

「われわれ自身の手によってつくられたこの機構がわれわれすべてにとって防衛にも恩恵にもならない。」³⁾

「われわれの不幸の責めはその大部分をわれわれのいわゆる文化が負っている。」⁴⁾

最終的にフロイトをしてこう言わしめている。これはそれより半世紀ほど前、労働者の側から人間の尊厳・自由・幸福を定義・主張したマルクスの視点から見れば資本主義社会の疎外状況が労働者に及ぼす病的な、神経症的な現れと理解することが出来よう。これはフロイトのリビドー理論から帰結した文化と個人の欲動の軋轢の問題を示す病理学的な表現である。こういった文化による「人間疎外」

の視点（フロイトはけっして「疎外」という概念を使ってはいないが）は都市問題の複雑化、労働と人間関係の多様性、及び社会の構成員の価値観の多様性が進んだ現代では、より複雑でより重層的になっている。パッペンハイムはその発展的疎外論によって明確に提示している。まずは彼の思想をしてみる。

2. パッペンハイムによる「疎外」概念の拡大

パッペンハイムが指摘した問題は、マルクスの資本論が読まれはじめた1870年代からおよそ80年ほど経た第二次大戦後のアメリカで取り上げられ始めた。彼はいわば都市型の人間疎外の諸形態を考察している。彼はマルクスの資本家と労働者、商品生産と労働における「疎外」関係の視点を超えて、労働者だけでなく、ホワイトカラーも含めた一般市民にも及ぶ「疎外状況」が都市生活・文化にまで広く拡散・浸透していることを指摘している。彼は、テンニエンスの「GemeinschaftとGesellschaft」の理論に依りながら、アメリカという産業資本が歴史上、いまだかつてなかったほどに巨大化した状況を目の当たりにして、どちらかといえば労働者よりも都市市民に焦点を当て、近代の新しい「疎外状況」を考察している。ところで、ヘーゲル・マルクス研究をもってその経歴をふりだし、ヒトラーが政権を握ってすぐさまアメリカに亡命して「大衆運動」の実践的可能性の研究へと入っていったマルクーゼもほぼ同じ研究視点の土壌に立っている。マルクーゼは二階建住宅・自動車・台所備品などの近代設備に代表されるアメリカ型消費社会はナチス・ドイツ、ソビエト共産主義と同様に大きな社会的統制をうけている。それに相対してヨーロッパの高級な芸術文化は衰退・消滅の危機にひんしており、それゆえ人間疎外の状況にあると指摘している。一方、パッペンハイムは近代の「疎外状況」を「技術」・「政治」・「社会構造」の三つの視点から考察した。「技術」の視点では、産業革命以来、機械と商品生産の関係とそれによってもたらされた新たな状況についての悲観的な事例が示された。コンピューターの魔法のような事務処理能力や原子爆弾の一瞬で10万人を殺戮する悪魔的な威力が人類に及ぼした不安と恐怖について言及している。しかし、高度産業技術が生活分野のあらゆる生産現場において現出した高能率・大量商品生産が社会の各階層・各年齢層に及ぼした影響や都市生活の現場に急速に現出した孤独の問題に対する考察はない。しかし、当時、大都市ニューヨークなどの市民の孤独な生活、及びそれを含めた都市ならではの問題がはらむ生活者の精神に及ぼすストレス・危機が見逃せない状況になっていた。「社会構造」の視点では、マルクスが80年前、哲学的な観点からアプローチした「労働と人間自由」の課題が現代では社会構造の変化によってすっかり異なったものになってしまったこと、つまり、労働は「自己の生命・自由を表現するための媒体」⁵⁾ではなく、単に生計を確保するための方策にすぎないものになってことを指摘している。マルクスが「労働者が商品に成り下がっている」⁶⁾と指摘した状況が今や否定できないほどに一般化していること、ロシア革命時に無知な農民を指導すべく要請されたインテリゲンチヤの存在意義が20世紀半ばのアメリカでは全く疑わしいものになっていること、マルクス主義運動の前提となっている「労働者と資本家」という単純な階層区分はもはや現実的なものではなく、社会の構成員の実相は、農民・労働者・インテリ・金融業者・資本家などが複層し、流動的な階級が混在した状態だとパッペンハイムは論じている。

また、アメリカにおいてはマスメディアによる宣伝によって商品と消費者が他に類を見ないほど強く結びつけられていると指摘するが、一般化、平板化した消費生活が市民の国家観・世界観にどのような影響をあたえているのか、さらにそれは政治にどのような影響を与えているのかについての考察はない。政治における「疎外」に関しては、パッペンハイムは戦争の動員によって多くの兵士が平和な市民生活から除外・疎外されたことに叙述を絞った。その単一な視点は、時代的な制約から致し方ないとも思われるが、やはりそれだけでは政治的な疎外要因を論述したと言うには不十分であるように思われる。例えば、アメリカのような民主主義国家であっても、戦争遂行のための他思想の抹殺や他民族の圧迫（合衆国創成期における先住民族の迫害、第二次大戦時における日系人の財産没収や隔離）、戦後、大衆政治運動がナチスの運動のようにマスメディアの大きな影響の下で創りだされる様相（レッド・パージ）についての分析はアメリカにおいてこそ可能であり、有効でなかったのか、という思いが残る。

それにしてもパッペンハイムはその論述の不徹底さ、事例の不十分さの憾みはあるものの、マルクス以来の「疎外」概念を資本・生産・労働のくびきから解き放ち、文化的「疎外」の要因と考察の価値をはっきりと示したことにその業績がある。このようにパッペンハイムは資本家と労働者との対立、商品生産における労働者の疎外といったマルクスが問題とした課題が、資本主義の歴史300余年の間に広範な都市生活全般の中で現実化していったことを指摘、分析した。その一方で晩年のフロイトは精神分析の分野において長年培った知見をもとに「人間文化」の地平に限定してこの問題を扱った。

3. 「不幸の根源的要因としての文化」

フロイトは『文化への不満』（1930）の中で、原始の段階を抜けた人類が互いに自己の利益を無制限に追って殺し合わないようになり、つまり、ホブズが言うように「人間人間への戦い」にならないように、人類は（法）文化を生み出したという。その文化のなかでも「芸術は最も華やかなもの」⁷⁾であると言う。しかし、その後、文化の意味は人類の社会性の獲得の要件から方向を転じる。彼はエロスとタナトスの概念を持ち出す。それは議論の流れから言っていささか唐突な印象を与えるが、エロス＝生産能力・生産行為とタナトス＝死・攻撃能力・攻撃行為のせめぎあいの上に文化が現出するとし⁸⁾、社会性の獲得という文化論に新たな視点を与える。さらにタナトスの源泉としてトーテミズム（始父への愛と憎悪に発する始原的な社会通念とでも言える）理論を据える。その理論の流れと方向づけにはやや強引さのきらいはある。というのもこの論文の3年前に上梓された『幻想の未来』（1927年）では、人間自由というヨーロッパ文化の究極の課題に宗教とその教義はなんら関与することはできないとフロイト自身が言っているからである。ここでは議論を複雑にしないためにエロスとタナトス及びトーテミズムのテーマはいったん留保し、もっぱら彼の「文化の不満」を分析的に考察したい。

フロイトは、文化は人類にその保存と抑圧の矛盾した二つの側面を持つとしたが、また「教養ある人、精神労働者は（文化による衝動の抑制、その結果としての不満（著者補足）をそれほど恐れる必要はない。・・・彼らの相当部分は文化の担い手なのである。」⁹⁾としている。それは社会の階層間における文化不満の度合いの違いを示唆するものであるが、ここではもう少しそれを詳細に検討してみたい。

4. 近代までの「文化」への不満 — 上流階級の不満 —

まず、文化といってもフロイトが捉えている概念の範疇はかなり広く、古代の父性部族の例をもとに話が進められているので、文化の創生時代から現代までの3000年から4000年間のこととなろう。それもおよそヨーロッパのユダヤ教・キリスト教時代に限定されており、ギリシア・ローマ時代の場合はほとんど想定されていないように思われる。その状況のなかで貴族や特権階級は自己社会の保存のために「文化」を形成してきたとフロイトは言う。¹⁰⁾ そこでは彼らは支配者であり、為政者であり、それゆえ文化の形成者、自分で作ったものの責任者であるから、当然のように不満は感ぜず、恐れはない。つまり彼らは文化の「担い手」であるから自分たちが作ったものに自縄自縛されることはない。彼らは特権階級であるがゆえに制度の抜け道をも当然もっていたであろうことは想像に難くない。そして特権とそれに付随した制度回避の秘策を代々、子孫に受け継いだことであろう。しかし、それも数百年という長い歴史的経過の中で考えると、自ずと限界があるはずだ。時代が近代に入り、ブルボン朝やハプスブルグ家をはじめ、多くの中・小貴族の末裔はるか昔の先祖が作り上げた文化の抑制、時にして圧迫からくる不満をひしひしと感じていたことであろう。シェイクスピアの戯曲やドイツ運命悲劇の諸作品の登場人物たちの不幸が、われわれにそのことを強く予感させる。彼らの日常の住まいである古い居心地の悪い宮城、父母の愛情の感じられない子への接し方、肩苦しい礼儀作法、政治的策略に満ちた婚姻制度（これが不満の大きな部分であろうか）、子への愛情の感じられない接し方への強い要請など、そこには不満を嘆く無数の末裔がいたと想像できる。ウォルポールの『オトランド城奇譚』、シラーの『ドン・カルロス』・『メッシーナの花嫁』、イブセン『人形の家』、モーパッサン『女の一生』— これらの作品では主人公たちは婚姻「文化」における男社会の横暴さに圧迫され、苦悩し、そして死の底へと追いやられている。彼らの苦悩と文化への不満は時代が近代へとさしかかる17世紀に醸成されていった。

近代は産業革命とフランス革命を経て資本家という新たな経済特権階級とその対極にある奴隷的労働者階級を生んだ。（労働者階級については別の章に譲る。）資本家— この新たな階級の特徴はその利益・利殖へのファウスト的な「はてしなき欲求」にあるだろう。フロイトは文化の目的と問題性として性衝動・攻撃衝動の抑制を挙げたが、ここで資本家のもつ文化の問題性は性衝動・攻撃衝動の変容としての利益・利殖への欲求の「はてしなき無抑制」にあるのではないか。W.ゾンバルトは、ルネッサンス期の資本主義経済とアメリカ大陸の大規模植民経済の育成にあたって主導的な役割を果たしたユダヤ商人が「タルムード」などの生活規範をもとに夫婦の性生活を抑制し、代わりにそこに投入されるはずのエネルギーを経済活動に多く振り向けたと論じている。¹¹⁾ 彼らの労働者を奴隷状態にして営まれるその貪欲な事業が利益を生めば生むほど更なる利益を求め。また、第二次大戦期までウクライナ、ルーマニア、ブルガリアなどの東欧圏でポプロム（民間人によるユダヤ人の大量虐殺）が多発していたのは、ユダヤ商人が土地領主から土地使用権を買い取って多くの農民・農奴を使役して多額の利益を得ていたという歴史的事実が教えている。彼らは現在の、また次の事業が失敗しないか

と常に不安に苛まれながら、より効率的な労働作業とより廉価な労賃を利用する方策を求め、始終頭を悩ませる。彼らにはこの切迫した仕事と生活への不満を発する余裕もなかったのではないか。彼らの中には自らが敷き、自らが嵌った利殖主義の罠に心身ともに疲れ果て、最終的に上流支配層から転落するまでそれに気づかない者もいるだろう。これもやや高級な段階かともいえるが「人間疎外」の一状況である。その人間疎外の状況はマルクスが問題とした近代の機械技術を伴う大量生産労働による労働者の「疎外」を生み出した資本家をも、労働者とはことなる様相ではあるが、幸福感から「遠ざけ」(entfremden)、「自由な人間性」から「疎外」しているわけである。

5. 「中間層と労働者階層、つまり一般大衆の抱く文化への不満」

フロイトは「教養人、精神労働者」とは対照的に「大衆は文化に対して敵意をもっている」と言った。¹²⁾ 大衆こそ文化の被害者という謂いなのであろう。ここでフロイトが言う「大衆」の範疇を吟味してみたい。フロイトはそもそも彼の文化論を展開するにあたって、社会における階級差をそれほど厳密な定義をもって考えてはいないようである。彼は上流階層・下層階級という概念を用いていない。彼の使う概念は主に人類・人間・個人・大衆である。時として大衆は人類と同じ意味で使われている。しかし、彼が「文化への不満」を踏み込んで考えた時、階級差に起因する概念を使わざるをえなかったのであろう。その際、「大衆」概念は「肉体労働者」の意味を持ったり、また時にはその対立概念となる「教養人・精神労働者」の意味を含み持ったりしている。その際、彼が宗教と幻想の本質的關係について述べる時、「大衆」概念は人類全般に近い最も広い意味で使われ、そして特に人類における「文化への不満」を詳述する時、「大衆」概念は肉体労働者の意味に局限されている。われわれはここでフロイトの理論に依拠して「文化への不満」を考える際、フロイトを手助けするために、もう少し「大衆」概念を吟味し、分析する必要があるだろう。それはマルクス、パッペンハイムやパールマン、マルクーゼラの知見をもとに最新の現代社会の状況も反映されるべきであろう。

前述のように、産業革命は産業資本家と工場労働者という新しい階級を生んだ。イギリスの農民たちは三度のエンクロージャーによって農村を離れ、あるいは追われて都市市民の下層部分を形成した。マルクスが『経済学・哲学草稿』及び『資本論』で展開した論争の前提となる社会構造は単純に資本家と工場労働者の二元的なものであった。彼の時代、社会は二元構造的であり、また議論を進めて行く上でそのように理解してゆくのが現実的であったのであろう。中間階級 (Mittelsklasse) という概念をエンゲルスは使っているが、それは貴族との区別において使用しており、彼自身もはっきり言っているように有産階級を指しており、明らかに大なり小なり資本家の側を意味している。総じて言えば、『資本論』の議論では王侯貴族など政治的支配層は念頭に入れられておらず、産業資本家と工場労働者の二元対立を基軸に進められている。マルクスはそこで

1. 労働価値と私有財産の価値の一致、
2. 労働とその成果である商品、及び賃金と商品の対価物である貨幣が人間としての労働者の「疎外」

の要因となる可能性、

3. 労働による人間疎外と宗教による人間疎外の同一視、
4. (これが究極的な目標であるが) 労働の人間疎外状況からの解放が人類全体の解放につながること

これらの論を展開し、経済・哲学の分野において重要な見識を紡ぎ出している。ここでヨーロッパだけでなく、同じ西洋文明ではあるが労働・都市生活の場面で商品の大量生産のためにより徹底した機械化及び合理的な労働管理が試みられたアメリカの事情を一瞥してみる必要がある。パールマンによれば19世紀の中頃からイギリスの労働事情と同じようにアメリカでもトレード・ユニオン（アメリカでは労働者側のみの組合）が各生産分野で広く組織され、労働者の雇用・非解雇権・労働時間の制限・賃金の向上などの運動が推し進められた。そして、第二次世界大戦後、産業形態の変化もあってはやくも1950年代に教師・工場管理者・会社事務職らによって規定される「ホワイトカラー労働者」が全就労者の40%近くになっていったといわれる。¹³⁾ 彼らの多くは「他人指向型」であり非政治的な性格にあると言う。比較的豊かな物質生活を提供され、労働者を含め彼らの多くは肉体労働者としての意識、またそこから疎外意識、そして権利伸長の意識が希薄になってゆく。それに伴って政治意識も薄れ、さらには企業広告・宣伝によって消費意識を増幅される。それに反比例して一部の知識層・学生を例外として社会問題への関心がヨーロッパ諸国に比して格段に薄れてゆく。これに関してマルクーゼが一貫して警告を発してきた（『一次的人間』）。そういった状況の中でフロイトの文化論が問題の遡上に再び浮かび上がってくる。

結語.

大衆は為政者によって性衝動も攻撃衝動も封殺されている。他者の殺戮・危害の禁止はもとより、一夫一妻制の徹底によってたとえ血族以外であっても婚外性交は禁忌とされている。加えて、都市化による交通渋滞からの負担、住宅事情・労働条件の劣化などによって、現代は大衆の不満は頂点に達しているのではないか。

文化への不満は、フロイトが指摘したように、やはりもともとは下層（労働者）階級にあったのではないか。上流階級（一般に代議士、弁護士、医師、大学教授、大企業役員など）は文化の罨に対する抜け道を豊富に持っているだろう。しかし、やがて西洋社会と日本などの階級間の差がかってほどはっきりしない現代では不満の度合いは全階級で薄められながらも社会全般に拡散した。つまり、人類全体が文化の恩恵に浴しながらも、その文化によって人類全体の生の衝動が抑制されているのである。フロイトの観点からすれば性衝動と攻撃衝動が極端に抑え込まれている。一夫一婦制の徹底、たとえ血族・姻族以外であっても性交渉が強く規制され、禁じられている。攻撃抑制の問題にしても戦場以外での他者への恣意的な暴行・殺人が禁じられている。その欲動はスポーツや文化活動といった穏やかで上品なものの中に置き換えられ、昇華されている。労働条件（賃金・労働時間）・職種の違いによる労働形態の相違・勤務地への通勤の際の交通渋滞の負担、そしてそれら全てを総合したところの経済格差 — これらによって個人の側からではなく社会の側の個人に対する攻撃性が増し、一部

にはそれが危険な状態にまで達しているのではないか。企業活動における熾烈なまでの弱肉強食な現場、長時間労働と商品販売における過酷な成約ノルマ — これらは幾ばくかの将来の希望をもって社会にでたばかりの多くの若者の心身を傷つけ、疲弊させ、ある場合は自らの命さえも奪っている。一方、現代では個人の側の攻撃性はそのわずかな兆候でも男女差別・民族差別・宗教差別・身体的弱者への無配慮という形で嗅ぎとられ、除去され、除去されようとしている。大衆の日常生活において、これはすでにフロイトの時代から始まっていたことであるが、文化の担い手の育成を委ねられた上流階級出身の為政者は、大衆の衝動のはげ口、もしくは緩和のために常に最新のテクノロジーを供給し続けている。大衆車・安価な家・家庭電化製品、最近ではこれらにまた高度な携帯可能な電子機器が付け加えられている。アメリカの銀行家は100年も前にこれらの計画を実現するために「商業ローン」（割賦払い）という画期的な支払いシステムを発明した。これによって大衆はやや誇張された宣伝をもとに目前にある満足を得ることが出来、蓄積された不満を忘れてがむしゃらに働く。しかし、資本家に用意されたローン（現代ではそれに一人あたり数十枚に及ぶカード・ローンが加わる）という魔法の杖の罠に気づくことはない。この天才的な商法によって大衆は放っておくと際限なく増え続ける利子を支払うために奴隷のように働かされ、血肉を絞りとられるわけである。

マルクスが標榜した労働者たちの自らの力による政治と生産活動による人間自由の実現を目指した共産主義社会も巨大な官僚制度の維持と帝国主義的資本主義社会からの防衛のための諸施策の実行過程において、資本主義社会にもない強引で硬直した官僚制度を生み出してしまった。その結果、周知のように最初の理想国家はその誕生から一世紀を経ずして崩壊、もしくは大幅な資本主義的修正を余儀なくされ、国民と民族は二つの大戦時にも劣らぬ不幸な経験をし、辛酸を舐めた。

今や文化の抑圧によって不満・不幸を感じているのは大人だけではない。上層階級の子弟、東アジアでは中間階級の子弟までもが、幼児段階を抜け出たばかりの年齢で、親たちの学歴不足、それによる職業経歴の不十分さを補償するために昼夜、勉強机の前に引きずり出されている。彼らは自己の学業成績に対し極度の緊張関係にある。彼らの成績が彼ら個人の問題ではなく、彼らの属する家・一族の盛衰に直接的に関係するからである。社会の諸機関にはこのような激しい緊張にうまく呼応している場合もある。一方でその緊張を解きほぐすために大人たち同様、彼らは大衆エンターテインメントに興じたりして、日常生活・学校で蓄積されたストレスや攻撃衝動を転換していわばガス抜きをさせている。

マルクーゼ、パッペンハイム、リースマンらが口をそろえて指摘しているように、アメリカでは上流階級と労働階級における日常生活、社会に対する意識の差が薄れている。上流階級の意識が労働者階級のそれにすり寄ったのか、労働者階級の己の社会的地位の向上への意識が消滅したからなのか、ここで明確に示すことはできないが、教師・事務員・技師などと規定される「知識労働者」・「ホワイトカラー労働者」といったマルクスの時代には理論上にも現実的にもなかった中間階層の一大勢力が発生、伸張している。リースマンが報告しているようにそれがアメリカの全就業者の40%に実際達していたかどうかは、もう少し詳しい検証が必要であるように思われるが、仮にそういった状況であったとすればフロイトが示したような「文化への不満」の対象はここでもやはり単に労働者階級のものだけであるという一方的なものではなくなっている。それゆえ「文化」へ息苦しさをおぼえ、何がし

かの形で不満を抱えている範囲は、今や大人や子供、男女を問はず社会の全階級、全階層に及んでいると考えるのもあながち的を外した視点ではないと言えるのではないか。つまり、フロイトがおよそ100年前に指摘したように、我々がその「生」の発展段階に応じて造り、醸成した「文化」が我々自身の生命を締め付け、その力を殺ぎ、消し去ろうとしている。しかも、それは一部の階級への圧迫ではなく、人類の全階級に及ぶ。また、フロイトの言うようにその圧迫は人間の「性衝動」・「攻撃衝動」の領域に留められるものではなく、ここで表現はいささか漠然としたものになってしまうが、それは人間の「生命の衝動・活力」全般の封殺とも言うべき「文化」の強大な敵対的圧力なのである。

注

- 1) フロイト (1930). 『文化への不満』, 24-25頁.
- 2) 同上 52-57頁及び71頁参照.
- 3) 同上 42頁.
- 4) 同上.
- 5) ヘルバルト・マルクーゼ (1968). 『初期マルクス主義研究 「経済学・哲学手稿」における疎外論』(良知力・池田優三訳), 26-27頁参照.
- 6) カール・マルクス (1969). 『経済学・哲学草稿』(城塚登・田中吉六訳), 56頁参照.
- 7) ジーグムント・フロイト (1980). 「宗教論－幻想の未来」(吉田正巳訳), 『改訂版 フロイト選集 第8巻』, 16頁, 及びジーグムント・フロイト (1953). 「文化論」(土田正徳訳), 『フロイト選集第6』, 36頁参照.
- 8) ジーグムント・フロイト (1953). 「文化論」(土田正徳訳), 『フロイト選集第6』, 『文化論』, 104頁.
- 9) ジーグムント・フロイト (1980). 「宗教論－幻想の未来」(吉田正巳訳), 『改訂版 フロイト選集 第8巻』, 54頁.
- 10) 同上10頁参照.
- 11) ヴェルナー・ゾンバルト (2015). 『ユダヤ人と経済生活』(金森誠也訳), 97,227,228頁.
- 12) ジーグムント・フロイト (1980). 「宗教論－幻想の未来」(吉田正巳訳), 『改訂版 フロイト選集 第8巻』, 5頁参照.
- 13) デヴィッド・リースマン (1968). 『孤独な群衆』(佐々木徹郎・他訳), 320頁.

文献一覧

- ヴェルナー・ゾンバルト (2015). 『ユダヤ人と経済生活』(金森誠也訳), 講談社.
- カール・マルクス (1962). 「賃金と資本」(長洲一二訳), 『世界思想教養全集12 マルクスの経済思想』, 河出書房新社.
- カール・マルクス (1969). 『経済学・哲学草稿』(城塚登・田中吉六訳), 岩波書店.
- ジーグムント・フロイト (1953). 「文化論」(土田正徳訳), 『フロイト選集第6』, 教文社.
- ジーグムント・フロイト (1980). 「宗教論－幻想の未来」(吉田正巳訳), 『改訂版 フロイト選集 第8巻』, 教文社.
- デヴィッド・リースマン (1968). 『孤独な群衆』(佐々木徹郎・他訳), みすず書房.
- ヘルバルト・マルクーゼ (1968). 『初期マルクス主義研究 「経済学・哲学手稿」における疎外論』(良知力・池田優三訳), 未来社.
- ヘルバルト・マルクーゼ (1974). 『一次の人間』(生松敬三・三沢謙訳), 河出書房新社.
- Sigmund Freud, *Texte aus den Jahren, 1885 bis 1938* herausgegeben von Anna Richards ; unter Mitwirkungen von Ilse Grubrich-Simitis Frankfurt Am Main Fischer Verlag, 1987.
- Sigmund Freud, *Das Unbehagen in der Kultur* ad fontes psychologie Creatspace Independent publishing Platform Ersteausgabe, 2018.

